

アミ語における「名動詞」

——名詞と動詞の中間的な振る舞いをする語群について——

“Noun-verbs” in Amis: words which stand in the middle of nouns and verbs

今西 一太

Kazuhiro Imanishi

広島大学

Hiroshima University

Abstract: The Amis language is a language spoken along the eastern coast of Taiwan. In the Amis language, nouns and verbs can be defined as words being preceded by case markers and those never being preceded by case markers respectively. There are, however, some words which are optionally followed by case markers; that is to say, their status lies somewhere in the middle of nouns and verbs. There have been very few, if any, previous works that deal with this type of words in the Amis language. The present paper focuses on the description of those words and proposes possible research in the future.

Key words: Amis, Austronesian, noun, verb, noun-verb

1. はじめに

本稿はアミ語¹の品詞分類における問題点を扱う。他の多くの言語と同様、形態統語的な基準を用いることにより、アミ語では「名詞」「動詞」という品詞を設定することが可能である。しかし、その形態統語的な基準を用いたことにより、名詞と動詞の中間的な特徴を持つと分析できる一群の語が出現してしまうのがアミ語の大きな特徴である。

様々な言語で名詞（原型的にはモノを指し示す）と動詞（原型的には動作を表す）の中間的な振る舞いをする語として形容詞（状態を表す）が挙げられることが多い（Payne 1997）。アミ語でもそのような「形容詞」的な特徴を持った語があり、それは名詞と動詞の中間に位置づけることが可能である。ただし、それとはまた別の基準、つまり状態を指し示す語ではない語が品詞分類上で名詞と動詞の中間に位置してしまうのがアミ語の特徴である。本稿ではその一連の語を作る接辞を詳しく記述し、今後の分析の基礎とすることを目標とする。

2. アミ語の品詞分類基準と名詞・動詞

Wu (2006: 68-73) が述べているように、アミ語において名詞と動詞を区別できる一番明確な基準は、格標示のマーカが付くかどうかである。アミ語の格標示は後接語として現れ(今西 2018)、以下の4つの種類がある。

表1 アミ語の格標示

述語	主格	属格	対格
u=	ku=	nu=	tu=

- (1) a. U=**singsi** ku=**fafahiyan**. 「その女性は先生です」
 PRE=teacher NOM=woman
- b. Mi-cicih=tu kaku tu=**kalukap**. 「私は紙を破った」
 Mi²-tear=already 1SG.NOM ACC=paper
- c. waay nu=**'efa** 「馬の脚」
 foot GEN=horse

(1) の3つの例文においてsingsi「先生」、fafahiyan「女性」、kalukap「紙」、'efa「馬」は全て格標示を受けている。アミ語においてはこれらの語を名詞と判断する。

一方、以下(2b)(2d)に見られるように、mi-tenuk「蹴る」や r<um>akat「歩く」など、動詞接辞mi-や<um>などが付いた語は格標示を受けることが出来ない。(2c)のように格標示の無い形にするか、(2e)のように動詞接辞のつかない形にすれば文法的に正しい文を作ることが出来る。

- (2) a. U=singsi kaku. 「私は先生です」
 PRE=teacher 1SG.NOM
- b. *U=mi-tenuk kisu takuwanan. 意図した意味：「あなたは私を蹴りました」
 PRE=MI-kick 2SG.NOM 1SG.ACC
- c. Mi-tenuk kisu takuwanan. 「あなたは私を蹴りました」
 MI-kick 2SG.NOM 1SG.ACC
- d. *Na'un-en ku=r<um>akat. 意図した意味：「気を付けて歩きなさい」(Wu 2006: 74)
 careful-EN³ NOM=walk<UM>
- e. Na'un-en ku=rakat. 「気を付けて歩きなさい」
 careful-EN NOM=walk

格標示を受けることが出来ない語は (2b) のmi-tenukのように動作を表すものもあれば、(3)にあるように状態を表すものもある。

- (3) a. *U=ma-fana' kaku cingranan. 意図した意味：「私は彼を知っています」
 PRE=MA-know 1SG.NOM 3SG.ACC
 b. Ma-fana' kaku cingranan. 「私は彼を知っています」
 MA-know 1SG.NOM 3SG.ACC
 c. *U=ma-tu'as=tu kaku. 意図した意味：「私は（もう）年寄りです」
 PRE=MA-old=PFV 1SG.NOM
 d. Ma-tu'as=tu kaku. 「私は（もう）年寄りです」
 MA-old=PFV 1SG.NOM

(2) (3) の例にある動詞接辞 (mi-, ma-, <um> など) が付いており、格標示を受けることが出来ないものをアミ語では「動詞」と考える。

3. 名詞と動詞の中間的な振る舞いをする一群の語

第2節の議論において、アミ語における動詞と名詞の基本的な区別をつけることが出来た。しかし、アミ語にはこのどちらにも属さない一群の語が存在する。これらの語は、名詞と同様、述部、主格、対格、属格の標示を受けることが出来るが、動詞と同様に述部において述部標示を受けずに単独での使用が可能であるという特徴を持つ。例えば、以下のma-mi-karung「運ぶ人、運ぶ」がその例である。ma-mi-karungは語幹karung「運ぶ」に動詞接辞miが付き、そこにさらにCa重複⁴と呼ばれる形態論的プロセスが加わった語である。

- (4) a. Cima ku=ma-mi-karung? 「誰が運びますか？／運ぶのは誰ですか？」
 who NOM=RED-MI-carry
 b. (U)=ma-mi-karung kisu anudafak. 「あなたが明日運びます／運ぶ者です」
 (PRE=)RED-MI-carry 2SG.NOM tomorrow

(4a)においてma-mi-karungは主格の標示を受けており、名詞として機能しているように見える。一方、(4b)においては述部標示のu=はあってもなくてもよい。述部に置く場合にu=が絶対に必要な名詞、絶対に不要な動詞 ((1) (2)を参照)のどちらとも違う特徴を示している。

このma-mi-karungのような語の品詞についての議論は管見ではImanishi (2008: 73-74)にごくわずかにあるのみであり、これらの語の記述は今までほとんどなされていないのが現状で

ある、著者のこれまでの調査でこのような語（語を作る接辞）は17種類見つかっている。以下、[1] から [17] までそれらすべてを列挙し、例を示して用法を記述していく。

[1] mi-...-an/ni-...-an⁵ : 過去（～した、～した人である）

(5) (U)=mi-tefad-an ningra ku-na=dafung. 「彼はこれを落とした」
 (PRE=)MI-fall-AN 3SG.GEN NOM-this=thing (直訳：これは彼によって落とされた)

日本語に訳す際、mi-tefad-anを名詞的に解釈すると「これは彼によって落とされたものだ」となり、動詞的に解釈すると「これは彼によって落とされた」となる。

[2] sa-動名詞：道具（～を使ってする、～する道具である）

(6) (U)=sa-pi-tangtang aku tu=pinginguyay ku-na=kasuy.
 (PRE=)SA-GER-boil 1SG.GEN ACC=bath NOM-this-wood
 「私はこの薪で風呂を沸かします」

pi-は動名詞の接辞である。和訳にあるように(6)を動詞的に解釈した場合、この文は道具を主語にする適用態 (applicative) であると捉えることが可能である。Wu (2006) などはこの解釈を取っている。一方、名詞的に解釈した場合は「この薪は私が風呂を沸かす道具です」という、単に道具を主語にしただけの名詞文となる。

[3] 動名詞-an：場所（～の場所です、～する場所である）

(7) (U)=ka-futi'-an aku ku-na=luma'.
 (PRE=)GER-sleep-LOC 1SG.GEN NOM-this=house
 「私はこの家で寝ます」

ka-は(6)のpi-と同様、動名詞の接辞である⁶。[2]の場合と同様、この文を動詞的に解釈すると、ka-...-anは場所を動詞の項とする適用態であると解釈することが出来る。一方、名詞的に解釈をすると「この家は私が寝る場所です」という、単なる場所を表す名詞文となる。

[4] Ca 重複-...-en：～するべきである、～するべきものだ

- (8) (U=)ka-kilim-en aku ku-ya=tamdaw. 「私はあの人を探さないといけない」
 (PRE=)RED-look.for-EN 1SG.GEN NOM-that=person

(8) を直訳すると「あの方は私に探されないといけない (人だ)」のようになる。日本語とアミ語が両方できる話者にこの文を日本語に訳すようお願いすると、「…探さないといけない」「…探さないといけない人だ」どちらでも構わないとの返答が来る。動作を表す表現と物を指し示す表現が同じ形式で現れている例である。

[5] nani- : ~から、からする人・もの

- (9) a. U=nani-cuwa kita a misatapang. (出典：原住民族語言線上詞典)
 PRE=NANI-what 1PLINC.NOM LNK begin
 「私たちはどこから始めましょうか？」
 b. Nani-cuwa kisu a tayni?
 NANI-what 2SG.NOM LNK come
 「あなたはどこから来ましたか？」(呉 2013: 463)

(9a) (9b) に見られるように、nani-も述部のu=があってもなくても使用できる語を作る接辞である。

[6] paku- : ~だと勘違いする、~だと勘違いされるものだ

- (10) (U=)paku-maan kisu turira? 「あなたはあれを何と勘違いしたの？」
 (PRE=)PAKU-what 2SG.NOM ACC.that

[7] 動詞-ay : 確かに~する/した、~する/した人である

- (11) (U=)r<um>madiw-ay cingra. 「彼は歌手です/彼は今(確かに)歌っています」
 (PRE=)-sing<UM>-AY 3SG.NOM

-ayは多くの先行研究で「名詞化接辞」「事実であることを表す接辞」という扱いを受けている(Wu (2006)、Imanishi (2008) など)。(11)は母語話者によると、彼が歌手(rumadiw「歌う」する人で、rumadiw-ay「歌手」)であるという意味にもなるし、歌手ではないが彼が実際

に本当に歌っている最中であるという意味にもなるとのことである。

[8] kalu- : ~にされたい、~にされたいものである

(12) (U=)kalu-fafahi kunini. 「この人を奥さんにしたい (直訳: これは奥さんにされたい)」
 (PRE=)KALU-fafahi NOM.this

(12) では主格名詞句が省略されているが、文脈から判断して「私はこの人を奥さんにしたい」の意味になる。

[9] malu- : ~だと信じられている、~だと信じられているものである

(13) (U=)malu-tayal aku kunini. 「私はこれを自分の決まった仕事だと思っている」
 (PRE=)MALU-work 1SG.GEN NOM.this (直訳: これは私によって仕事だと信じられている)

[10] sapa- : ~する予定である、~する予定のものである

(14) (U=)sapa-tafu aku tisuwanan.
 (PRE=)SAPA-package 1SG.GEN 2SG.ACC
 「私はあなたに贈り物をあげます」
 (直訳: 私によってあなたへの荷物になる予定 (の物) です)

[11] patala- : ~に持っていく、~に持っていくものである

(15) (U=)patala-likul. 「後ろに持っていった (物です)」
 (PRE=)PATALA-back

[12] saki- : ~のため、~のためのもの

(16) (U=)saki-wadis konini a sapaiyu.
 (PRE=)SAKI-tooth NOM.this LNK medicine
 「この薬は歯のため (の物) です」

[13] tada- : 本当に～だ

- (17) (U=)tada-suwal kunian.
 (PRE=)very/true-story NOM.this
 「これは本当の話です」

[14] haki- : ～から、～からである

- (18) (U=)haki-anini.
 (pre=)haki-now/today
 「今（今日）から（の物）です」

[15] matu- : ～に似ている、～に似ているものである

- (19) (U=)matu-fafuy ku-ra=wacu.
 (PRE=)MATU-pig NOM-that=dog
 「あの犬は豚に似ている（物だ）」

[16] sanu- : ～を使う、～に使うものである

- (20) (U=)sanu-suwal nu=matu'asay ku=pinangang aku.
 (PRE=)SANU-talk GEN=elderly.people NOM=behavior 1SG.GEN
 「私は年長者の言った通りに行動します」
 （直訳：私の行動は年寄りの言う事を使っています／使っているものです）

[17] halu- : ～と一緒に、～と一緒にのものである

- (21) (U=)halu-kisu a mipadang a matayal
 (PRE)HALU-you LNK help LNK work
 「あなたと一緒に（手伝って）働きます」

以上、これまでに見つかっている17種類の形態プロセスを整理した。次の節でこれらについての考察を行う。

4. 考察とまとめ

第3節で記述を行った一群の語は、述部標示があってもなくてもよいという点で動詞や名詞と異なる語であり、格標示を基準に品詞分類を行う場合は名詞とも動詞とも違う品詞として設定しなければならない。Imanishi (2008) はこれを noun-verb と呼び、独立した品詞として扱っている。本稿でもそれにしたがってこの品詞を「名動詞」と呼ぶことにする。

多くの言語において名詞と動詞の間に位置する品詞として形容詞が挙げられる。例えば、以下の先行研究は動詞と名詞の間に形容詞的な状態を表す語があると主張しているものである。

[1] Ross (1972 : 316) は以下の連続体を想定し、名詞から形容詞を経て動詞に至る意味変化を記述している

(22) Verb > Present participle > Perfect participle > Passive participle > Adjective > Preposition (?) > “Adjectival noun” (e.g., *fun*, *snap*) > Noun

[2] Sasse (2001) は動詞と名詞を連続体の両極端にある原形 (prototype) であるとみなし、両者を以下のように定義している。

表2 Sasse (2001) における名詞と動詞

Noun	⇔	Verb
Most inert	⇔	Most versatile
Objects	⇔	Dynamic situations
More time-stable entities	⇔	Less time-stable situations
Naming a participant	⇔	Reporting an event
Discourse referent	⇔	Episodic

[3] Croft (2000, 2003) は objects - properties - actions という連続体を想定している。それぞれが名詞、形容詞、動詞として各言語に現れる傾向にある。

[4] Walsh (1996) は nouns - adjectives - nerbs - vouns - verbs という連続体を北オーストラリアの Murrinh-Patha 語に想定している。Nerbs と vouns は形容詞と動詞の間にある中間的な範疇であり、nerbs は名詞に近い特徴、vouns は動詞に近い特徴を持つ、としている。

一方、アミ語の名動詞はこれとは様相を異にする。第3節に列挙した語の意味を考えても、例えばCroftの言うようなpropertyや、形容詞が通常表すとされる状態の意味を表しているとは必ずしも言えないものが多く含まれている。

名詞と動詞の間として形容詞以外のものを想定する可能性の一つは、Hopper and Thompson (1984, 1985) が述べる名詞と動詞の違いにある。Hopper and Thompsonによると、名詞は“refer to a participant”するものであり、動詞は“assert the occurrence of an event”するものである。名動詞と言うのは状況によってその両方の機能を持つことが出来る一群の語である、と定義できる可能性がある。

例えば、(23)において名動詞のmamikarungとsapitangtangは、話の中に登場する人や物を指し示す役割を果たしている。

- (23) a. Cima=sa ku=**ma-mi-karung** tu-ya faki.
 who=say TOP-RED-MI-carry.message ACC-that uncle
 「誰があの叔父たちにメッセージを持っていくのか、と言った」
 (直訳：叔父たちにメッセージを持っていくものは誰か、と言った)
- b. Awa=tu ku=**sa-pi-tangtang**.
 NEG.EXST=already TOP=INST-GER-cook
 「料理をする道具がもう無い」

一方、(24)においては同じ語が出来事を記述するのに用いられていると考えることも可能である。

- (24) a. **ma-mi-karung** kisu anudafak
 RED-MI-carry.message 2SG.TOP tomorrow
 「お前が明日メッセージを持っていく」
- b. **sa-pi-tangtang** tu=hemay ku-na=kasuy
 INST-GER-cook ACC=rice TOP-this=wood
 「この薪で料理をします」

このように、名詞的な機能と動詞的な機能の両方を果たしているものがアミ語における名動詞であるという主張は可能かもしれない。しかし、その主張を補強する為には、例えば談話における名動詞の述部標示の現れ方など、さらなる分析が必要となる。

本稿ではアミ語において名詞と動詞の間に位置する形態統語的特徴を持つ語を記述し、それがいわゆる形容詞や状態を表す語とは違った特徴を持つことを指摘した。今後の研究とし

ては、これらの語が実際に談話の中でどのように使われているか、特にどのような状況において述部標示のu=が表れているのかを分析する必要がある。それにより、本節でHopper and Thompsonを引用しつつ指摘した名詞と動詞の違いの現れである可能性を探って行く必要がある。

注

- 1 アミ語はオーストロネシア語族に属する言語で、台湾の東部海岸沿いに住むアミ人によって話されている言語である。アミ人自体は15万人～20万人いるが、40代以下の世代はアミ語を流暢に喋ることが出来ない事が多いため、実際の母語話者は民族数の半分以下である。文字表記で注意を要するものは以下：<e> = [ə]、<c> = [ts]（ただし<i>の前で [tɕ]）、<s> = [s]（ただし<i>の前で [ɕ]）、<y> = [j]、<d> = [t~k]、<'> = [ʔ]、<u> = [u~o]、<i> = [i~e]。本稿で用いる例文のうち、出典を明示していないものは全て著者自身がアミ人の調査協力者（台東県長濱出身の中部方言話者）から聞き取り調査で得たものである。本稿のデータはアミ語中部方言のデータであり、他の方言であれば違う分析結果となる可能性がある。本稿では以下の略号を用いる：SG 単数、PLINC 複数包括形、NOM: 主格、GEN: 属格、ACC: 対格、PRE: 述部、PFV: 完了相、LNK: リンカー。
- 2 mi-は動詞接辞の一つであり、主格名詞句が主体的な動作を行う際に用いられる。
- 3 -enは動詞接辞の一つであり、ここでは命令を表す。
- 4 Ca重複とは、語の最初の子音の後に母音aを付ける形で重複を行うプロセスである。例えばkilimen「探す」という語にCa重複が起こると、ka-kilimenという語に、mikilimならma-mikilimとなる。
- 5 これら両者の違いについては良くわかっていない。母語話者によると、これらはどちらも全く同じ意味である。
- 6 pi-とka-はどちらも動名詞の接辞で、単独で語幹について「～すること」を表す。pi-は主体的に動作をする意味の時、ka-は受身的な意味の場合に用いるという区別がある。

参考文献

- Croft, William (2000) *Radical construction grammar: syntactic theory in typological perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Croft, William (2003) *Typology and universals (second edition)*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Hopper, Paul and Sandra A. Thompson (1984) “The discourse basis for lexical categories in universal grammar.” *Language* 60, 703-752.
- Hopper, Paul and Sandra A. Thompson (1985) “The iconicity of the universal categories ‘noun’ and ‘verb’.” In: John Haiman (ed.), *Iconicity in Syntax*, 151-186. Amsterdam and Philadelphia: Benjamins.
- Imanishi, Kazuhiro (2008) *A basic description of the Amis language*. M.A. Thesis, the University of Tokyo.
- Payne, Thomas (1997) *Describing morphosyntax: a guide for field linguists*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ross, J. Robert. (1972) “The category squish: Endstation Hauptwort.” In: *Papers from the eighth meeting of the Chicago Linguistic Society*, 316-328. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Sasse, Hans-Jürgen (2001) “Scales between nouniness and verbiness.” In: M. Haspelmath, E. König, W. Oesterreicher, W. Raible (eds.), *Language typology and language universals: an international handbook (vol.1)*, 495-509. Berlin and New York: Walter de Gruyter.
- Walsh, Michael (1996) “Vouns and nerbs: a category squish in Murrinh-Patha (Northern Australia).” In: William McGregor (ed.), *Studies in Kimberley languages in honour of Howard Coate*, 227-252. München - Newcastle: Lincom Europa.
- Wu, Jing-lan Joy (2006) *Verb classification, case marking, and grammatical relations in Amis*. Ph.D. Thesis, the State University of New York.
- 吳明義 (2013) 《阿美族語辭典》。台北：南天書局。
- 今西一太 (2018) 「アミ語における接語・接辞の分類に関する試論」『東京大学言語学論集』39, 99-118.